

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成 22 年度派遣報告書

——インド・MOPA INDIA、ベンガル語 (H24. 7. 16-H24. 10. 16) ——

平成 24 年入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程 1 回生
上田 彩季

自身の研究テーマについて

自身の研究テーマは、「バングラデシュにおける「BOP ビジネス」の効果および可能性の包括的検証」である。「BOP ビジネス」は今まで市場として注目されなかった BOP 層を対象とし、企業利益と BOP 層の生活水準向上の双方に貢献することを目的としたビジネスモデルである。これらのビジネスモデルの受益を受ける BOP 層の生活は、事業参入により社会環境および生活環境が劇的に変化するために、BOP 層の視点からビジネスモデルを客観的に評価し、持続可能なビジネスモデルを考える必要がある。以上のことから、本研究ではバングラデシュで「BOP ビジネス」を展開している各企業・またその受益者である BOP 層に対して聞き取り調査を行うことにより、複数のビジネスモデルを比較することにより、これらの相違点、特徴や今後のポテンシャルについて明らかにし、理想となるビジネスモデルを提案することとする。現在、多くの欧米および日本の企業が「BOP ビジネス」を途上国において展開しており、関連研究も増えつつある。しかしながら、既往の研究では個々のビジネスモデルの展望および課題について扱ったものが多く、複数のビジネスモデルを包括的に扱い、比較対照することにより、それぞれの効果、価値および可能性について検討されたものは皆無である。したがって、本研究が目指す、包括的な「BOP ビジネス」の比較・検討および理想ビジネスモデルの提案は、客観的に BOP 層の視点からビジネスモデルを評価できることから学術的意義は大きい。

研修言語の概要

研修言語であるベンガル語は、バングラデシュやインド西ベンガル州の公用語であり、世界で 5 番目に多く話されている。一般的に、インド西ベンガル州やバングラデシュ北西部の発音がきれいなベンガル語であり、バングラデシュの首都であるダッカや第二の都市であるチッタゴンの言葉は訛りが多いと言われている。今回はバングラデシュを調査国と予定していたため、インド滞在時にはバングラデシュ出身の方にベンガル語を教えてもらった。

語学研修の内容について

約 3 ヶ月の派遣のうち、初めの 3 週間は予備調査、調査地選定のためにバングラデシュに滞在した。バングラデシュ滞在中には、日本から持参したベンガル語の教材と市場で買った子供用の文字の練習帳を用い、文字を覚えながら、また実生活では店員や、リキシャや CNG のドライバーとの会話や値段交渉を通じてベンガル語を勉強した。外出するときは辞書を持ち歩き、分からない単語に出会う度に辞書

をひいてボキャブラリーを増やしていった。そのあと、インド・オリッサ州の州都ブバネーシュワルに約2ヶ月間滞在し、ベンガル人の友達の母親に家庭教師をお願いし、ベンガル語の授業を毎日1時間半行ってもらった。授業中はベンガル語のみで会話することを意識して取り組んだ。また、日常会話に必要な語句だけでなく、自分の研究に必要な専門用語も重点的に教えて頂いた。

研修期間中に印象に残った体験や経験

インド・オリッサ州滞在中には、インド人同士が現地語のオリヤー語だけでなく、英語もしくは英語やヒンディー語、オリヤー語、ベンガル語を混ぜて会話していることも多く、普段の生活に何種類もの言語が飛び交っており、数種類の言語を巧みに操るインド人に驚いた。ほとんど単一民族、単一言語の日本で育った私にとってこれは大変印象的であり、インドの国の大きさや多民族性を実感した。また、バングラデシュ滞在中には様々な日本の企業やNGOの駐在員の方々とお会いし、バングラデシュと日本の経済状況や、バングラデシュにおける日本のNGOの取り組み等についてのお話をお伺いすることが出来、『日本の企業やNGOから見たバングラデシュ』と言う視点についてもご意見を頂く貴重な機会を得ることが出来た。

目標の達成度や反省点について

ベンガル語はほぼ何も喋れない状態で渡航してしまっただが、今回の派遣で生活に必要な簡単な日常会話は話せるようになった。ただ、出発前にベンガル語の文字や簡単な会話を覚えてから渡航していたらより効果的に勉強を進めることが出来たと思う。今回のITP派遣では調査予定地のバングラデシュだけでなく、インドにも滞在することが出来、同じ南アジア圏でも全く違う文化や慣習が根付いていることを肌で実感し、複数の地域を見ることによって自身の研究テーマを見直し再考することが出来てよかった。語学の研修だけでなく、研究の視野を広げることが出来た充実した3ヶ月間を過ごすことが出来、バングラデシュ、インドにおいてホームステイさせて頂いた家族の方をはじめにお世話になったすべての方に感謝したい。最後にこのような貴重な機会を与えて頂き、また、出発前の手続き、滞在中にも常に温かくサポートしてくださった東長先生、西川さんにこの場をお借りして厚く御礼を申し上げたい。



↑インド・オリッサ州の聾啞学校



↑ベンガル語の授業風景



↑バングラデシュのリキシャ